

大口町史

（現代史編）

はじめに

濃尾平野の北東部に広がる木曾川由来の扇状地、網の目のように河川が流れていた頃、わたしたちの先祖はこの地で活動をはじめました。旧石器・縄文時代のことです。

弥生時代、人々が余野に定住し、その南東にあたる仁所野に墳墓を造り、約千年前から記録が遺る小口神社は、この地域や人々の暮らしを見守ってきたことでしょう。

戦国の世となる直前、織田広近が小口城を築き、犬山へ通ずる織田街道沿いは、多くの人の往来風景が思い浮かびます。

その約百年後、御供所村で生を受けた堀尾吉晴は、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に仕え功を重ねながら、佐和山、浜松を経て遠く山陰の地で松江城とその城下町を築き生涯を閉じます。また同じ村で生まれた堀尾金助は、母とともに東海道熱田の精進川に架かる裁断橋を舞台として、母子慈愛の物語を紡ぎました。その足跡は、四百有余年を過ぎた今なお、それぞれの地とわたしたちを結び、交流を生み出しています。

江戸時代、氾濫を繰り返し尾張の人々を苦しめていた木曾川に治水が施され、入鹿池の造営によってこの地の新田開発は進み、五条川を軸とする田園が広がるまちの原風景がつくられ、村営の慣習や行事が定着し、自治の枠組みも萌芽

しました。

明治・大正時代、産業革命の進展によって隣接するまちでは紡績業が隆盛する中、この地は桑の栽培や養蚕を主産業とする純農村の営みが続きました。

アジア・太平洋戦争が終結した後、市町村再編という大きなうねりによって、わたしたちのまちは逆境に立たされ、その苦難を乗り越えるために先人達は、工場誘致や五条川堤への桜植栽、土地改良事業や区画整理事業に取り組み、今日見るまちの姿につながる礎を築きました。

二十一世紀、地方分権時代を迎え、「自立と共助」をまちづくり理念として掲げ、諸施策を展開したことによって今日、このまちに関わる方々が公益に寄与する活動に生きがいを感じて暮らしています。

「飲水思源」の精神を信条とする私は、このまちのあゆみを、『大口村誌』（大口村成立から約三十年後の一九三五（昭和十）年発刊）、『五十年の歩み』（村政五十周年となる一九五六年発刊）、『大口町史』（町政二十周年となる一九八二年発刊）を読み解き学びました。

そこには、諸先輩方が皆、郷土のあゆみを振り返り文字として整理し、後世に遺すことで、郷土を愛する心を育み広げ、町勢の発展を願う想いを感じ取りました。

二〇一七（平成二十九）年十二月、約一年半後に平成の時代の閉幕が公表され、その三年後におおぐちは、人生でいえば還暦となる町制施行六十年を迎えることから、歴代町村長に習い町史編さんの適時と判断し、二〇一八年一月に

町史編さん室を設置しました。

「おおぐち」には悠久の歴史がありますが、一九四五年以降は、世の中の飛躍的な発展から一旦取り残されながら、それに立ち向かった先人の尽力によって今日の繁栄を掴み取る、まちの歴史にとって大きな変化を重ねる画期です。

そこで本書は主に、一九四五年から二〇二三（令和五）年までの歴史的事実と、彩りとなる人々の生活や地区のあゆみ、風俗に光を当て、実体験や見聞きした話をコラムとして数多く掲載しています。本文を読み進める際に、それらを織り交ぜて頂くと、人々の記憶や想いを垣間見て、当時の出来事をより鮮やかに感じ取って頂けるものと期待しています。

「古きものは古きがゆえに尊いのである」という言葉に出会った時、時代の変化に対応する際には、先人が次世代へ脈々と引き継いだ、教訓や知恵、恩を十分踏まえてから先に進まねばならないと強く胸に刻みました。『大口町史』現代史編』発刊は、次世代にまちの発展を託す種蒔きです。

末筆になりましたが、本書を編さんするにあたり、格別のご尽力を賜りました監修の後藤致人先生、編集委員会委員をはじめ、資料の調査及び情報提供などをいただきました全ての関係各位に、厚く御礼申し上げます。

令和五年十二月

大口町長 鈴木 雅博

凡例

- 1 本書は『大口町史（現代史編）』として、アジア・太平洋戦争終結（一九四五（昭和二十）年）から二〇二二（令和五）年までの大口町域に関わる歴史を叙述した。なお、必要に応じてその前後の時代についても叙述した。
 - 2 本文の記述は、原則として常用漢字・現代仮名遣いを用いた。ただし、歴史的用語や固有名詞、学術用語については、この限りではない。また、企業・会社名については、株式会社等を略した箇所もある。なお、コラムについては、語り手の想いを直接的に表現するため、語り手個人の歴史的認識・経験・方言などをそのまま記載する。
 - 3 読みにくい人名・地名・歴史的用語、難読または誤読のおそれがある語句には、適宜振り仮名を付した。読み方について諸説あるものについては、推測によったものもある。地名については、必要に応じて（ ）に現行の市町村名を記した。なお、現行市町村の表記は、二〇二三年三月三十一日現在のものによった。
 - 4 本文中では、原則として敬称・敬語を略した。
 - 5 年月日については、西暦を用い、適宜（ ）で和暦を付した。改元があった年については、原則として出来事のあった日の元号を用いた。ただし、コラムに記載している語り手の生まれ年については、語り手をより身近に感じてもらおう観点から和暦を用いた。
 - 6 資料（史料）を引用する際は、原則としてそのまま引用した。
 - 7 本文に用いた資料（史料）の注記は最小限にとどめ、巻末の参考文献一覧に示した。
 - 8 写真・図・表には、章ごとの通し番号を付し、巻末の掲載図版一覧で表題・出典などを示した。
 - 9 巻末に主な事項・人名などの索引を付した。
- 本文・引用文・図・表の中に、身分や職業に関する差別的な用語や表現が用いられている場合があるが、史実に基づいて研究する立場から、本書ではそのまま使用したもので、これらの差別を容認するものではない。

『大口町史』現代史編』目次

はじめに

凡例

目次

第一編 自然

第一章 地誌と気候

第一節 地誌

第二節 気候

第二章 生物

第一節 野生動物

第二節 町民が残した野生動物の記録

第三節 植物

第三章 災害

第一節 明治・大正時代の災害

第二節 地震

第三節 台風

第四節 豪雨

3
7
11
22
31
39
47
52
58

第二編 政治・経済

序章 「大口」と呼ばれるまで

第一節 原始・古代……………63

第二節 中世……………71

第三節 近世……………75

第四節 近代……………77

第一章 村政・町政の移り変わり

第一節 地方自治法施行……………81

第二節 自立への礎をつくる……………82

第三節 財政健全化と施設整備……………87

第四節 地方分権時代への対応……………94

第五節 子孫に贈るまちづくり……………99

第二章 変わりゆくまちの姿

第一節 母なる五条川と桜……………105

第二節 土を生かす……………116

第三節 まちの発展を願う……………124

第四節 人が行き交う……………130

第五節 気持ちを伝える……………149

第六節 きれいな暮らし……………154

第三章 豊かな暮らしの実現

第一節 暮らしを守る……………173

第二節 いのちを守る……………191

第三節	健康のまち	211
第四節	暮らしに潤いを	220
第五節	皆で支えあう公共	240
第六節	議会	263
第四章	健やかな成長を願う	
第一節	いのちを育む	267
第二節	幼児の成長	269
第三節	子どもの成長	281
第五章	人口と財政	
第一節	人口	317
第二節	財政	323
第六章	産業	
第一節	産業構造の変化	333
第二節	農業の動向	339
第三節	工業の動向	362
第四節	商業の動向	369
第三編	暮らしと文化	
第一章	暮らしの変化	
第一節	日常生活	381
第二節	通過儀礼と家庭生活	391
第三節	地元意識の変化	400

第四節	余暇の過ごし方	408
第五節	子どもの文化	412
第二章	住民意識の変化	
第一節	『前田功日記』と戦前・戦後の大口	425
第二節	戦争の経験	427
第三節	終戦と戦後復興	436
第三章	神社・寺院	
第一節	神社	441
第二節	寺院	467
第四章	風習	
第一節	祭り	483
第二節	風習	488
第三節	伝承	496
第五章	古文書・記念碑	
第一節	古文書	501
第二節	記念碑	508
第六章	指定文化財	
第一節	国・県指定文化財	517
第二節	町指定文化財	519
第七章	人物伝	
仙田 半畊		525
酒井 椿溪		527

野田 正昇	529
社本 鋭郎	532
大竹 喜久雄	534
渡邊 米次郎・脩	535
舟橋 金造・高次	538
赤堀 禪稻	540
前田 暉	542
高木 天仙・大宇	544
第四編 地域の変化	
第一章 地域のあゆみ	551
第一節 秋田	553
第二節 豊田	555
第三節 大屋敷	558
第四節 外坪	560
第五節 河北	563
第六節 余野（垣田・さつきヶ丘）	564
第七節 小口（上小口・中小口・下小口）	569
第二章 地名いまむかし	575
第三章 地名の由来・伝承	587
第一節 秋田	588
第二節 豊田	595

第三節	大屋敷	602
第四節	外坪	607
第五節	河北	609
第六節	余野	616
第七節	上小口	620
第八節	中小口	625
第九節	下小口	630

卷末資料

人口動態の推移	641
大口町一般会計決算額	643
大口町特別会計決算額	648
大口町内に生息する動物・植物一覧	651

年表	661
あとがき	670
引用・参考文献一覧	672
掲載図版一覧	704
協力者一覧	716
『大口町史』現代史編』編さん関係者名簿	717
索引	